四季の花

SG-4SEASON:2冊組み ¥7,980-

推薦のことば

冷泉 為人　冷泉家時雨亭文庫理事長

今般、現代の最先端の科学技術を結集した精細で華麗なオフセット印刷による〈四季の花〉が完好な姿で復刊された。

この〈四季の花〉の元本は、明治41年（1908）、ほぼ100年前に江戸琳派の酒井抱一やその弟子鈴木其一を中心に、さらに其一門の中野其明などを加えた三代にわたる、凡そ500図にも及ぶ精巧な木版刷の〈四季の花〉である。

江戸琳派、すなわち抱一画の特色は、軽妙でしかも華麗であり、殊に意匠性に富んでいる。デザイン性がある。その上何よりも品格がある。

これらのことが今回の〈四季の花〉にも充分に窺える。現代の絵画や工芸の作家にも有益なものとなるであろう。

藤　慶之　美術ジャーナリスト

江戸後期に活躍した琳派の画家・酒井抱一は当初、狩野派や円山派、土佐派などの画風を学び、最後には尾形光琳の作風に感動して光琳芸術の再興を志す。深い観察眼で草花図を好んで描き、抒情性も豊かな装飾画風を形成していった。生前、植物図鑑ともいうべき四季折々の草花図を数多く描き残していたのを、明治41年（1908）芸艸堂が精巧な木版刷「四季の花」に刊行。

今回出版された全二巻の「四季の花」は、芸艸堂版を忠実にカラー印刷で復刻したもの。上巻には春の雪割草から夏の夕がおまで二百六十五種の花が、下巻には夏のさんざしの花、秋の若竹から冬のかん蘭まで二百六十三種の花が、それぞれ収録されている。各巻末には、前京都大学教授で農学博士の故・塚本洋太郎氏が、一種ずつ丁寧な解説を加え、抱一の弟子・鈴木其一らが追加描写した部分に実物の花の真景と違った点なども指摘して興味深い。いずれにしても、日本画、植物、俳句などの研究にも役立ちそうな必携の書。

故塚本 洋太郎　前京都大学教授・農学博士

すでに万葉以来の文学に日本人の四季感は多様に表現されてきたが、とくに、「古今和歌集」の成立以来、四季の花によって、それを表わすことが確立されたといってよい。歌に表わした四季感に比べると、絵画に表わした四季感の発展ははるかに遅れ、室町時代以後といえよう。《中略》ことに琳派の残した「四季花鳥図」には多くの傑作が含まれている。

日本の四季花鳥図では、年代を経ると共に次第に植物の数が増加しているが、植物数の増加は国内の自生植物数の増加だけでなく、中国からの渡来植物も増加していた。さらに幕末には西洋から渡来した多くの草木が加えられ、異国趣味を深くした。

ここに紹介される「四季の花」はその代表例の一つで、琳派の最後を飾る、抱一、其一、およびその後継者其明の残した、草木画帳ともいうべきもので、大体四季の順序に配列されている。

■絵　　師　酒井 抱一
　　鈴木 其一
　　中野 其明
■寄　　稿　榊原 吉郎
　　（京都市芸術大学名誉教授）
■解　　説　故塚本 洋太郎
　　（前京都大学教授・農学博士）
■仕様・体裁　B5判／各272頁／並製
■定　　価　各巻3,990円（本体3,800円）
■上巻（春夏編）　ISBN4-86152-079-7
　下巻（秋冬編）　ISBN4-86152-080-0

WWW.SGS-JPN.COM